

幼児の仲間関係に関する研究

社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメント の地位群間比較と下位群間比較

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成6年4月28日受理)

仲間関係は子どもの社会的諸能力の発達を促進する重要な社会的学習の機会と環境を提供する。子どもは仲間関係を通して、社会的適応に必要な知識・技能・行動を習得すると考えられる (Asher & Parker, 1989)。この考えに従うと、仲間から拒否される子ども (拒否児) や無視される子ども (無視児) は、仲間から人気のある子ども (人気児) や平均的な子ども (平均児) よりも社会的発達が未熟であり、社会的スキルや社会的コンピテンスに乏しいと仮定される。子どもの仲間関係に関する従来の研究は様々な研究アプローチを使用しながら、この仮定を支持する実証的証拠を示してきた (例えば, Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990)。

例えば, Coie & Dodge (1983) は小学3年生と小学5年生の学級を対象に4年間にわたる縦断的な追跡研究を行い、毎年ソシオメトリック指名法と仲間アセスメント指名法を実施している。その結果によると、拒否児の地位は最も維持されやすく、1年間の期間で45%が、2年間の期間で34%が、3年間の期間で34%が、4年間の期間で30%が相変らず拒否児のままであった。また、人気児へ変化したり人気児を維持している子どもは、仲間から「協調的である」とか「リーダーである」と見られ、「破壊的である」や「けんかをしかける」と見られていなかった。それに対して、拒否児へ変化したり拒否児を維持している子どもは、「協調的である」や「リーダーである」の仲間アセスメント得点が低く、「破壊的である」や「けんかをしかける」の仲間アセスメント得点が高かった。また、無視児へ変化したり無視児を維持している子どもは、「恥ずかしがり一人で活動する」の仲間アセスメント得点が高い傾向にあった。Coie & Dodge (1983) の研究は拒否児や無視児の特徴像が人気児と異なるだけでなく、拒否児の地位が児童期を通じて比較的維持されやすいことを示している。その点で拒否児が最も社会的適応の問題を抱える可能性が強いことを示唆している。

その後のアセスメント研究も、拒否児群は群全体として見ると、他の地位群よりも攻撃性が強いことを報告している (Coie & Dodge, 1988; 佐藤・佐藤・高山, 1988; 前田, 1993; 前田・片岡, 1993)。しかし最近の研究は、拒否児群の群内変動性が他の地位群よりも大きく、拒否児の全員が必ずしも強い攻撃性を示すとは限らないと考えるようになってきた。そのため、拒否児群をさらに攻撃的拒否児群と非攻撃的拒否児群の下位群に分類したり (Bierman, Smoot, & Aumiller, 1993; French, 1988, 1990; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990), 拒否児群や非人気児群を攻撃的下位群, 引っ込み思案下位群, あるいは攻撃的・引っ込み思案下位群などに分割して比較するようになってきた (Hymel, Bowker, & Woody, 1993; Rubin, LeMare, & Lollis, 1990)。例えば, Bierman, Smoot, & Aumiller (1993) は小学1年生～小

学6年生までの男児を対象にして、ソシオメトリック指名法と攻撃性に関する仲間アセスメント指名法を実施して、攻撃的拒否児群、非攻撃的拒否児群、攻撃的非拒否児群および非攻撃的・非拒否児群（対照児群）の4下位群を分類している。その結果、攻撃的拒否児群は非攻撃的拒否児群よりも「身体的攻撃」や「言い争いや破壊的行動」を多く示し、非攻撃的拒否児群は攻撃的拒否児群よりも「恥ずかしがりで消極的」であった。また、「向社会的行動」では攻撃的拒否児群と非攻撃的拒否児群の両群とも、対照児群よりも有意に少なかった。

このように拒否児群の下位群を比較した研究結果は、拒否児群の中にも攻撃性の強い攻撃的拒否児と引っ込み思案傾向の強い非攻撃的拒否児が混在していることを明らかにしている。しかし残念ながら、これらの研究はいずれも小学生を対象としており、幼児の下位群間を比較した研究はほとんど見られない。また、いずれも拒否児群の下位群を比較することに焦点を当てているが、その他の地位群の下位群については比較検討していない。幼児を対象とした前田・片岡（1993）は、確かに攻撃性尺度得点では拒否児群の群内変動性（分散）が大きいけれども、向社会的行動を代表する社会的コンピテンス尺度得点では拒否児群よりもむしろ人気児群の分散が大きく、引っ込み思案尺度得点では拒否児群よりもむしろ無視児群の分散が大きい傾向にあることを見いだしている。これらの結果から、それぞれの地位群を最も特色づける行動特徴において分散が最も大きくなり、異なる下位群から構成されるのではないかと考えられる。

本研究では下位群間比較のデータに乏しい幼児を対象にして、以下の2点について検討した。第1に、人気児、拒否児、平均児、無視児、両論児の5地位群間で社会的行動特徴がどのように異なるかを仲間アセスメントと実習生アセスメントの両面から比較検討する。これは、まず最初に従来の地位群間比較の研究結果と本研究の地位群間比較結果がどの程度一致するかを調べておくためである。また、本研究でも各地位群をそれぞれ特色づける社会的行動特徴において、最も群内変動性が大きいかな否かを確かめるためである。第2に、人気児、拒否児、平均児、無視児の各地位群を特色づけるそれぞれの行動特徴に基づいて、各地位群を2つずつの下位群に分割し、これらの下位群間の差異がどのような行動特徴において顕著であるかを明らかにする。

方 法

対象者 対象児は愛媛大学教育学部附属幼稚園の年中児64名と年長児62名の計126名であった。男女の内訳は表3に示すとおりである。彼らの平均年齢と年齢範囲は年中児が5歳2か月（4歳8か月～5歳7か月）、年長児が6歳2か月（5歳7か月～6歳7か月）であった。実習生は愛媛大学教育学部幼稚園教員養成課程の3回生17名（男性1名と女性16名）であった。彼らは9月または10月に約1か月間附属幼稚園で教育実習を経験した。各クラスを担当した実習生の人数（9月組+10月組）は年中児1クラスが5名であり、残りの年中児1クラスと年長児2クラスは4名であった。

実施時期 幼児を対象とした写真ソシオメトリック指名法と評定法および写真仲間アセスメントは1992年11月24日～11月27日にかけて実施した。実習生アセスメントは教育実習終了後の1992年11月10日に実施した。

材 料 (1)幼児の個別カラー写真カード：写真ソシオメトリック指名法と評定法および写真仲間アセスメントでは、各幼児の個別カラー写真を使用した。写真は一人で壁を背に立って

表1 仲間アセスメント得点の因子分析の結果 (N=126)

項目	仲間アセスメント項目の質問内容	因子			h ²
		I	II	III	
1.	みんなが積み木をしたり、絵本を読んだり、楽しく遊んでいます。そんな時、一人ぼっちでいる子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	.11	-.18	.74	.60
2.	みんなが積み木をしたり、お外で楽しく遊んでいます。ところがその中に、すぐに怒ったり、けんかを始める子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	.85	-.17	.03	.75
3.	みんなが砂場で遊んだり、お部屋の中で遊んでいます。その中で誰とでも仲良く遊べる子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	-.20	.52	-.08	.31
4.	みんながブロックで遊んだり、砂場で遊んでいます。ところが、お友達の邪魔ばかりしている子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	.59	-.33	.25	.53
5.	お友達がけんかをして泣いています。そんな時、親切に助けてあげている子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	.03	.69	-.17	.51
6.	みんなが楽しくお話ししながら、買い物ごっこや砂遊びをしています。ところが、お友達とあまり話をしていない子もいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	-.10	.08	.52	.29
7.	みんなが遊んでいるときに(男:「～するな」「～してこい」「～せーや」(女:「～したらいかん」「～してや」「～してきてや」)というふうに、よくお友達に命令している子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	.79	-.04	-.07	.63
8.	みんなが鬼ごっこをして遊んでいます。ところが、一緒に遊んでいない子がいます。そんな時、誘ってあげても仲間に入らない子は誰かな？	.36	-.28	.50	.46
9.	お友達と一緒に遊びたい時に、「入れて」と言えたり、お友達の使っている「おもちゃ」を貸して欲しい時に「貸してね」と上手に言える子がいます。その子は○○組さんの中では誰かな？	-.21	.67	.09	.50
	平方和	1.93	1.45	1.18	4.58
	寄与率	.21	.16	.13	.51

る姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5.5cm×横4.5cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を縦7cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて個別写真カードを作成した。実習生アセスメントでは、各クラスの同性仲間全員の個別写真カードを写真アルバム上に縦4枚×横4枚に配列した写真ボードを使用した。また、写真ソシオメトリック評定法では3つの分類箱を使用した。各箱は底面積が12cm×12cm、3つの側面の高さが5cm、残り一側面の高さが12cmの蓋のない容器形であった。各箱には高さ12cmの側面の内側面にそれぞれ3色の画用紙に描いたハッピーな顔(ピンク色)、ニュートラルな顔(黄色)、悲しそうな顔(青色)の表情略線画を貼りつけてあった。

(2)仲間アセスメント項目: Pekarik, Prinz, Liebert, Weintraub, & Neale (1976)の仲間評価項目を参考にしながら、さらに状況説明文を追加して表1に示す9項目を作成した。前田(1993)で使用した項目とほぼ同様である。

(3)実習生アセスメント項目: 表2に示す13項目を使用した。各項目の行動特徴を簡単に説明すると、項目1は「一人遊び(熱中)」, 項目2は「一人遊び(非熱中)」, 項目3は「積極的な

仲間遊び」, 項目4は「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」, 項目5は「協調性」, 項目6は「仲間遊びへの非加入」, 項目7は「上手な意志伝達と依頼」, 項目8は「命令」, 項目9は「仲間との会話の少なさ」, 項目10は「けんかの始発」, 項目11は「報復的攻撃」, 項目12は「仲間への適切な応答」, 項目13は「引っ込み思案」を表している。

手続き 幼児に対する写真ソシオメトリック指名法と評定法および写真仲間アセスメントは、個別に次の順序で連続して実施した。(1)写真と名前の確認, (2)仲間アセスメント(項目1～項目3), (3)写真ソシオメトリック指名法, (4)仲間アセスメント(項目4～項目9), (5)写真ソシオメトリック評定法。幼児に対するこれらのテスト手続きと(6)実習生アセスメントの手続きについて、以下具体的に説明する。

(1)写真と名前の確認：各対象児と同一クラスの同性仲間全員の写真カードを縦4枚×横4枚に配列して対象児に提示した。仲間の写真カードを一枚ずつ指さし、「この子は誰かな」と写真の仲間名を質問して仲間の名前と写真を一致させ得るか否かを確認した。この結果、ほとんどの幼児が仲間全員の名前を言えた。

(2)仲間アセスメント(項目1～項目3)：次に、同性仲間全員の写真カードを机上にランダムに縦4枚×横4枚に配列して提示した。その中から対象児自身の写真カードを取り出して対象児の左横に置き、残りの写真カード全部を指さしながら、次のように教示した。「ここに、△△組(対象児の組名)のお友達の写真がありますね。これから、△△組さんの中で、こんなことするお友達は誰かな?と○○ちゃんに聞いていきますから、わかったらその子の写真を指さして教えてくださいね。」この後、表1の仲間アセスメント項目1～項目3までの各質問をし、それぞれに該当すると思う仲間の写真カードを3名まで選ばせた。その際、対象児が指さした仲間の写真カードはその都度裏返して置き、残りの写真カードの中から2番目、3番目の仲間写真カードを選ばせていった。

(3)写真ソシオメトリック指名法：再度、対象児を除く同性仲間全員の写真カードを机上にランダムに縦4枚×横4枚に配列し、次の教示を与えて肯定的指名を3名まで選ばせた。「この中で、○○ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番(2番目に、3番目に)一緒に遊びたい子は誰ですか?」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名まで選ばせた。「今度は、この中から○○ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番(2番目に、3番目に)一緒に遊びたくない子は誰ですか?」

(4)仲間アセスメント(項目4～項目9)：(2)と同様の手順で、表1の仲間アセスメント項目4～項目9までの各質問をし、それぞれに該当すると思う仲間の写真カードを3名まで選ばせた。

(5)写真ソシオメトリック評定法：まず机上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て、右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え、どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児を除く仲間全員の写真カードをランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを一枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は△△組のお友達の写真を一枚ずつ○○ちゃんに渡します。○○ちゃんは、写真のお友達をよく見て、○○ちゃんが幼稚園で一緒に遊びたい子だなあとと思ったら、この箱(ハッピーな顔の箱)に入れて下さい。遊びたくない子だなあとと思ったら、この箱(悲しそうな顔の箱)に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなあとと思ったら、この箱(ニュートラルな顔の箱)に入れて下さい。そ

表2 実習生アセスメント項目の質問内容

項目	質 問 内 容
1.	一人で何かに熱中して遊んでいることが多い。
2.	何もしないで一人でぼんやりしたり、うろうろしていることが多い。
3.	何人かの遊びグループの中で、仲間と積極的にやりとりしながら遊んでいることが多い。
4.	自分の思いどおりにならないとすぐに怒ったり、かんしゃくを起こして遊びの雰囲気を壊しやすい。
5.	順番を守ったり、道具を譲ったりして仲間と協調して遊ぶ。
6.	友達の遊びをじっと見ていることが多く、仲間の遊びに入ろうとしない。
7.	自分のしたいことを上手に伝えたり、相手にして欲しいことを上手にお願いする。
8.	友達に～するな、～せーや、～したらいかん、などとよく命令する。
9.	自分から友達に話しかけたり、友達から話しかけられることが少ない。
10.	相手が何もしていないのに、自分から言い争いやけんかをし始めることが多い。
11.	言い争いやけんかをするが、自分からし始めることは少ない。相手の攻撃や邪魔に対して抗議したり報復するときに限られている。
12.	仲間のいうことに耳を傾け、笑顔で応答したり、相手の要求を快く受け入れる。
13.	恥ずかしがり屋で、引っ込み思案である。仲間から遊びに誘われても一緒に遊ばないことが多い。

れでは、この写真の子はどの箱に入れますか？」

(6)実習生アセスメント：それぞれのクラスを9月または10月の教育実習中に担当した大学生を対象に行った。各担当クラスの同性仲間全員の写真ボードを提示し、それを見ながら表2の項目1～項目13のそれぞれについて、各幼児にどの程度あてはまるかを評定させた。評定は1点（全く当てはまらない）～4点（最も強く当てはまる）までの4段階評定であった。

得点化の方法 (1)ソシオメトリック指名法の得点：まず対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。肯定的指名数と否定的指名数のそれぞれの合計数について本人を除くクラスの同性仲間数で除算し、仲間1人当りからの指名数を算出した。その後、年齢別・男女別に2クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差を表し、SI得点は好かれるか拒否されるかにかかわらず仲間への影響力が強いことを表す。従来の研究によると、L得点とD得点の相関は中程度の負相関かあるいは無相関に近い値を示すと報告され、両得点が必ずしも一次元的な表裏関係にないことを示している。本研究でも両得点の相関値は年中児（ $N=64$ ）で $r=-.16$ （ns）、年長児（ $N=62$ ）で $r=-.45$ （ $p<.01$ ）であった。また、SP得点とSI得点の相関は無相関に近く、両得点は相互に独立の次元であると報告されている。本研究でも両得点の相関値は年中児および年長児とも $r=.00$ であった。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：対象児ごとに、仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。この後、評定した仲間数で除算し、平均評定値を算出した。この平均評定値は仲間からの受容度を表す一次元的な指標と考えられている。本研究でも平均評定値とL得点との相関値は年中児（ $N=64$ ）で $r=.23$ （ $p<.10$ ）、年長児（ $N=62$ ）で $r=.60$ （ $p<.01$ ）であった。また、平均評定値とD得点との相関値は年中児（ $N=64$ ）で $r=-.56$ （ $p<.01$ ）、年長児（ $N=62$ ）で $r=-.79$ （ $p<.01$ ）であった。

表3 対象児の各地位群および各下位群の人数内訳と分類基準

分類基準	年中児		年長児		全体				
	男	女	男	女	男	女	計		
(1) 地位群									
人気児	SP > 1, L > 0, D < 0		9	8	9	9	18	17	35
拒否児	SP < -1, L < 0, D > 0		7	6	7	6	14	12	26
平均児	-1 < SP < 1, -1 < SI < 1		10	8	10	8	20	16	36
無視児	SI < -1, L < 0, D < 0		4	7	5	6	9	13	22
両論児	SI > 1, L > 0, D > 0		2	3	1	1	3	4	7
	計		32	32	32	30	64	62	126
(2) 下位群									
人気児 C高群	CZ > 1		3	2	6	5	9	7	16
非C高群	CZ < 1		6	6	3	4	9	10	19
拒否児 A高群	AZ > 1		3	2	4	2	7	4	11
非A高群	AZ < 1		4	4	3	4	7	8	15
平均児 典型群	-1 < CZ, AZ, WZ < 1		5	4	5	4	10	8	18
非典型群	CZ or AZ or WZ < -1 CZ or AZ or WZ > 1		5	4	5	4	10	8	18
無視児 W低群	WZ < -1		1	4	0	2	1	6	7
非W低群	WZ > -1		3	3	5	4	8	7	15
	計		30	29	31	29	61	58	119

(3) 仲間アセスメントの得点：各項目別に、(1)のL得点と同様の得点化方法を使用して仲間1人当たりからの指名数を算出した。この得点に基づいて9項目に関する主因子分析を行った。表1は、対象児全員(N=126)に基づく因子分析の結果から、直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。因子負荷量の絶対値が0.50以上の項目についてみると、第I因子は項目2, 4, 7の3項目から成っている。これら3項目はいずれも攻撃性に関連するので、第I因子を「攻撃性」因子と命名した。第II因子は項目3, 5, 9の3項目から成っている。これら3項目は社交性や友好性に関連しているので、第II因子を「社会的コンピテンス」因子と命名した。第III因子は項目1, 6, 8の3項目から成っている。これら3項目は孤立性や対人的消極性に関連しているので、第III因子を「引っ込み思案」因子と命名した。

仲間1人当たりからの指名数について年齢別・男女別に標準得点へ変換し、対象児ごとにそれぞれの因子を構成する3項目ずつの標準得点の平均値を求めた。この平均値を再度、年齢別・男女別に標準得点へ変換して攻撃性尺度(以下A尺度と略す)得点、社会的コンピテンス尺度(以下C尺度と略す)得点および引っ込み思案尺度(以下W尺度と略す)得点を作成し、以下の分析で使用した。

(4) 実習生アセスメントの得点：表2の項目別に各対象児に対する実習生の評定値を加算し(4点満点×クラス担当の実習生数)、対象児ごとに評定値の合計得点を求めた。それを評定した実習生の人数で除算し、実習生1人当たりの平均評定値を算出した。

地位群と下位群の分類方法 地位群の分類はCoie & Dodge (1988)の分類方法に従った。写真ソシオメトリック指名法のL得点, D得点, SP得点, SI得点に基づいて各対象児を5つの地位群のいずれかに分類した。表3は、各地位群の分類基準と分類された各地位群の人数内訳を示したものである。人気児は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない幼児たちである。拒否児は人気児と反対の傾向を示し、多くの仲間から拒否されやすい幼児たちである。平均児は好かれる程度も拒否される程度も平均的な幼児たちである。無視児は好かれることも

拒否されることも少ない幼児たちである。なお両論児は、ある仲間からは好かれるが別の仲間からは拒否される幼児たちである。いわば、仲間の意見が賛否両論に分かれる幼児たちである。

下位群の分類については両論児を除く4つの地位群の中から、さらに表3の仲間アセスメント尺度得点の基準を満たすものを選出して8つの下位群を構成した。表3のAZ, CZ, WZはそれぞれ仲間アセスメントのA尺度得点, C尺度得点およびW尺度得点(いずれも標準得点)を意味する。要するに, C高群は人気児の中で仲間から社会的コンピテンスが高いと見られている幼児たちから構成される。非C高群は人気児の中でC高群に分類されなかった残りの幼児たちから構成される。同様に, A高群は拒否児の中で仲間から攻撃性が高いと見られている幼児たちから構成され, 非A高群は残りの拒否児たちで構成される。典型群は平均児の中でAZ, CZ, WZのいずれも平均的な幼児たちで構成され, 非典型群は残りの平均児たちで構成される。W低群は無視児の中で仲間から引っ込み思案ではないと見られている幼児たちで構成され, 非W低群は残りの無視児たちで構成される。本研究の無視児群の中にはW高群に該当する幼児が少なく, 逆にW低群に該当する幼児が多かったので, W尺度得点については高低を逆にして分類した。

結 果

地位群間比較

表4は, 5つの地位群別に各得点の平均値とSDを示したものである。まず各得点別にBartlett法を使用して5地位群間の分散の有意差検定を行った。さらに, 5地位群間の分散に有意差がある場合はF検定で特定の群間の有意差を検定した。次に, 各地位群間の平均値比較を行った。5群の分散等質性が保証される場合には各得点別に一要因分散分析を行い, その後でDuncan法を使用して特定の群間差を検定した。なお, 各群の分散が等しくない場合には各得点別にWelch法によるt検定を使用して各群間の比較を行った。

(1)ソシオメトリック得点: L得点の分散は $\chi^2(4) = 15.76$, $p < .005$ で有意となり, 人気児の分散が両論児を除く他の3群の分散よりも(人>拒と人>無は $p < .05$; 人>平は $p < .001$), 拒否児の分散が平均児のそれよりも有意に大きかった($p < .05$)。L得点の平均値比較についてはt検定の結果をまとめると, 人気児>両論児>平均児>拒否児≒無視児であった(人>両は $p < .05$; 両>平は $p < .01$; その他は $p < .001$)。D得点の分散も $\chi^2(4) = 31.26$, $p < .001$ で有意となり, 拒否児と両論児の分散が他の3群の分散よりも大きかった(拒否児と他の3群間はいずれも $p < .001$; 両論児と他の3群間はいずれも $p < .05$)。D得点の平均値比較についてはt検定の結果をまとめると, 両論児≒拒否児>平均児>無視児≒人気児であった(すべて $p < .001$)。SP得点の分散は $\chi^2(4) = 7.57$ で有意でなかった。そこでSP得点の平均値比較では分散分析を行った。その結果, 地位群の主効果が $F(4, 121) = 154.81$, $p < .001$ で有意となり, 人気児>平均児>無視児>両論児>拒否児であった(平>無と無>両は $p < .05$; その他は $p < .01$)。SI得点の分散は $\chi^2(4) = 23.06$, $p < .001$ で有意となり, 拒否児と人気児の分散が無視児と平均児のそれよりも有意に大きかった(拒>無は $p < .01$; 拒>平は $p < .001$; 人>無は $p < .05$; 人>平は $p < .001$)。SI得点の平均値比較についてはt検定の結果をまとめると, 両論児>拒否児≒人気児>平均児>無視児であった(拒>平は $p < .10$; 人>平は $p < .05$; その他は $p < .001$)。平均評定値の分散も $\chi^2(4) = 16.89$,

$p < .005$ で有意となり、拒否児の分散が他の4群のそれよりも大きかった(拒>平は $p < .01$ ；拒>無は $p < .05$ ；拒>人は $p < .001$ ；拒>両は $p < .05$)。平均評定値の平均値比較についてはt検定の結果をまとめると、人気児は他の4群よりも(すべて $p < .001$)、無視児は拒否児よりも($p < .001$)、平均児は拒否児よりも($p < .001$)それぞれ有意に多かった。

(2)仲間アセスメント尺度得点：A尺度得点の分散は $\chi^2(4) = 32.38$, $p < .001$ で有意となり、拒否児の分散が両論児を除く他の3群よりも有意に大きく(拒>平は $p < .01$ ；拒>無と拒>人は $p < .001$)、人気児の分散は両論児や平均児のそれよりも有意に小さかった(両>人は $p < .05$ ；平>人は $p < .01$)。A尺度得点の平均値比較についてはt検定の結果をまとめると、両論児>拒否児>平均児>無視児>人気児であった(平>無は $p < .10$ ；平>人は $p < .01$ ；その他は $p < .001$)。C尺度得点の分散は $\chi^2(4) = 1.18$ で有意でなかった。そこでC尺度得点の平均値比較では分散分析を行った。その結果、地位群の主効果が $F(4, 121) = 9.93$, $p < .001$ で有意となり、人気児が他の4群よりも有意に多かった(いずれも $p < .01$)。W尺度得点の分散も $\chi^2(4) = 1.01$ で有意でなかった。W尺度得点の平均値比較でも分散分析を行った。その結果、地位群の主効果が $F(4, 121) = 2.99$, $p < .05$ で有意となり、拒否児が両論児や人気児よりも有意に多かった。

(3)実習生アセスメント評定得点：いずれの項目得点でも分散は等質であった。そこで、各項目得点別に分散分析を使用して5群間の平均値比較を行った。地位群の主効果が有意となった項目得点について述べると、まず項目3では $F(4, 121) = 2.43$, $p < .10$ で有意傾向を示し、

表4 各得点の地位群別平均値(SD)

得点	人気児 (N=35)	拒否児 (N=26)	平均児 (N=36)	無視児 (N=22)	両論児 (N=7)
(1)ソシオメトリック得点					
L得点	1.15(0.67)	-0.93(0.46)	0.08(0.34)	-1.04(0.44)	0.56(0.40)
D得点	-0.79(0.38)	1.33(0.82)	-0.07(0.36)	-0.68(0.37)	1.48(0.61)
SP得点	1.94(0.65)	-2.26(0.81)	0.15(0.51)	-0.36(0.59)	-0.92(0.83)
SI得点	0.37(0.87)	0.40(1.06)	0.01(0.48)	-1.72(0.55)	2.04(0.61)
平均評定値	2.54(0.18)	1.98(0.36)	2.30(0.23)	2.34(0.22)	2.20(0.16)
(2)仲間アセスメント尺度得点					
A尺度	-0.60(0.43)	1.00(1.16)	-0.15(0.64)	-0.47(0.55)	1.48(0.72)
C尺度	0.74(0.89)	-0.63(0.90)	-0.10(0.78)	-0.21(0.94)	-0.19(0.81)
W尺度	-0.26(0.92)	0.57(1.06)	-0.10(0.97)	-0.06(0.86)	-0.15(0.88)
(3)実習生アセスメント評定得点					
項目1	2.03(0.61)	2.29(0.89)	2.04(0.69)	2.33(0.68)	2.00(0.51)
項目2	1.91(0.63)	1.86(0.72)	1.69(0.57)	2.15(0.73)	1.79(0.47)
項目3	2.74(0.73)	2.73(0.83)	2.92(0.72)	2.41(0.76)	3.28(0.50)
項目4	1.72(0.71)	2.34(0.85)	1.81(0.68)	1.84(0.72)	2.79(0.52)
項目5	3.10(0.57)	2.64(0.69)	3.04(0.60)	2.95(0.72)	2.38(0.35)
項目6	1.99(0.72)	1.93(0.75)	1.77(0.60)	2.29(0.77)	1.84(0.76)
項目7	2.73(0.69)	2.47(0.76)	2.89(0.54)	2.66(0.80)	2.26(0.68)
項目8	1.97(0.78)	2.53(0.79)	2.06(0.85)	1.94(0.76)	3.33(0.42)
項目9	2.04(0.85)	1.94(0.79)	1.81(0.68)	2.27(0.93)	1.88(0.63)
項目10	1.31(0.39)	1.70(0.63)	1.35(0.46)	1.22(0.41)	2.43(0.58)
項目11	3.41(0.54)	2.88(0.84)	3.31(0.59)	3.25(0.56)	2.58(0.55)
項目12	2.94(0.66)	2.67(0.73)	3.05(0.54)	2.89(0.67)	2.10(0.47)
項目13	1.93(0.83)	1.68(0.60)	1.65(0.63)	2.15(0.80)	1.72(0.59)

A:攻撃性 C:社会的コンピテンス W:引っ込み思案

両論児が人気児，拒否児，無視児よりも多い傾向にあった。項目4では $F(4, 121) = 5.38$, $p < .001$ で有意となり，両論児と拒否児がそれぞれ他の3群よりも有意に多かった（両論児と3群間の差はすべて $p < .01$ ；拒否児と3群間の差はすべて $p < .05$ ）。項目5では $F(4, 121) = 3.54$, $p < .01$ で有意となり，人気児，平均児，無視児が両論児よりも有意に多かった（無 $>$ 両は $p < .05$ ；その他は $p < .01$ ）。項目7では $F(4, 121) = 2.04$, $p < .10$ で有意傾向を示し，平均児が両論児よりも多い傾向にあった。項目8では $F(4, 121) = 6.14$, $p < .001$ で有意となり，両論児が他の4群よりも（すべて $p < .01$ ），拒否児が人気児や無視児よりも（いずれも $p < .05$ ）有意に多かった。項目10では $F(4, 121) = 10.93$, $p < .001$ で有意となり，両論児 $>$ 拒否児 $>$ 平均児 \div 人気児 \div 無視児であった（拒 $>$ 平と拒 $>$ 人は $p < .05$ ；その他は $p < .01$ ）。項目11では $F(4, 121) = 4.50$, $p < .005$ で有意となり，人気児，平均児，無視児の3群が両論児よりも（すべて $p < .01$ ），人気児が拒否児よりも（ $p < .05$ ）それぞれ有意に多かった。項目12では $F(4, 121) = 3.84$, $p < .01$ で有意となり，両論児が他の4群よりも有意に少なかった。

各地位群の下位群間比較

表5は人気児および拒否児の下位群別に，表6は平均児および無視児の下位群別に各得点の平均値とSDを示したものである。まず Welch 法による t 検定を使用して各地位群内の2つ

表5 各得点の下位群別平均値 (SD)

得点	人 気 児		拒 否 児	
	C高群 (N=16)	非C高群 (N=19)	A高群 (N=11)	非A高群 (N=15)
(1)ソシオメトリック得点				
L得点	1.39(0.72)	0.95(0.55)	-0.85(0.42)	-0.99(0.48)
D得点	-0.84(0.30)	-0.74(0.43)	2.01(0.73)	0.83(0.43)
SP得点	2.23(0.72)	1.69(0.46)	-2.86(0.82)	-1.83(0.43)
SI得点	0.55(0.84)	0.21(0.87)	1.16(0.86)	-0.16(0.81)
平均評定値	2.63(0.13)	2.47(0.19)	1.79(0.39)	2.12(0.26)
(2)仲間アセスメント尺度得点				
A尺度	-0.73(0.28)	-0.48(0.49)	2.21(0.59)	0.11(0.47)
C尺度	1.61(0.41)	0.01(0.39)	-0.46(1.12)	-0.75(0.69)
W尺度	-0.28(0.90)	-0.24(0.94)	0.99(1.23)	0.26(0.77)
(3)実習生アセスメント評定得点				
項目1	2.05(0.63)	2.02(0.59)	2.22(0.99)	2.35(0.81)
項目2	1.96(0.70)	1.87(0.57)	2.01(0.87)	1.75(0.55)
項目3	2.68(0.72)	2.78(0.74)	2.75(0.98)	2.71(0.69)
項目4	1.46(0.53)	1.93(0.76)	2.81(0.85)	2.00(0.67)
項目5	3.19(0.52)	3.02(0.60)	2.25(0.73)	2.94(0.48)
項目6	2.07(0.83)	1.93(0.61)	1.93(0.86)	1.93(0.66)
項目7	2.88(0.69)	2.61(0.67)	2.10(0.66)	2.74(0.71)
項目8	1.68(0.48)	2.22(0.89)	2.72(0.70)	2.40(0.82)
項目9	2.06(0.96)	2.03(0.75)	2.06(0.98)	1.86(0.60)
項目10	1.21(0.29)	1.39(0.44)	2.03(0.70)	1.46(0.48)
項目11	3.65(0.40)	3.21(0.56)	2.55(0.91)	3.12(0.70)
項目12	3.23(0.55)	2.70(0.65)	2.31(0.86)	2.93(0.47)
項目13	1.96(0.90)	1.91(0.77)	1.70(0.73)	1.67(0.49)

A:攻撃性 C:社会的コンピテンス W:引っ込み思案

表6 各得点の下位群別平均値 (SD)

得点	平均児		無視児	
	典型群 (N=18)	非典型群 (N=18)	W低群 (N=7)	非W低群 (N=15)
(1)ソシオメトリック得点				
L得点	0.00(0.33)	0.16(0.34)	-1.00(0.41)	-1.06(0.45)
D得点	-0.05(0.40)	-0.08(0.31)	-0.75(0.48)	-0.65(0.29)
SP得点	0.05(0.50)	0.24(0.51)	-0.25(0.62)	-0.41(0.56)
SI得点	-0.05(0.53)	0.08(0.41)	-1.75(0.64)	-1.71(0.51)
平均評定値	2.38(0.17)	2.22(0.25)	2.41(0.13)	2.31(0.24)
(2)仲間アセスメント尺度得点				
A尺度	-0.21(0.51)	-0.08(0.75)	-0.54(0.64)	-0.44(0.50)
C尺度	-0.09(0.49)	-0.11(0.99)	0.17(1.33)	-0.39(0.61)
W尺度	-0.23(0.53)	0.04(1.26)	-1.00(0.23)	0.38(0.68)
(3)実習生アセスメント評定得点				
項目1	2.00(0.81)	2.07(0.54)	1.71(0.38)	2.62(0.59)
項目2	1.61(0.44)	1.78(0.67)	1.64(0.66)	2.39(0.63)
項目3	3.07(0.69)	2.78(0.73)	2.99(0.82)	2.14(0.54)
項目4	1.71(0.51)	1.91(0.80)	1.50(0.64)	2.00(0.71)
項目5	3.07(0.54)	3.02(0.65)	3.54(0.35)	2.68(0.69)
項目6	1.64(0.45)	1.89(0.70)	1.80(0.84)	2.52(0.61)
項目7	2.94(0.50)	2.83(0.57)	3.31(0.81)	2.36(0.59)
項目8	2.21(0.87)	1.91(0.81)	1.91(0.93)	1.95(0.67)
項目9	1.82(0.63)	1.81(0.72)	1.92(1.08)	2.43(0.81)
項目10	1.31(0.28)	1.39(0.59)	1.03(0.07)	1.31(0.47)
項目11	3.31(0.57)	3.31(0.60)	3.61(0.49)	3.08(0.50)
項目12	2.99(0.52)	3.11(0.55)	3.31(0.39)	2.69(0.68)
項目13	1.64(0.48)	1.66(0.76)	1.84(0.86)	2.29(0.73)

A:攻撃性 C:社会的コンピテンス W:引っ込み思案

の下位群間の差を検定した。

(1)人気児の下位群間比較：まずソシオメトリック得点ではL得点でC高群>非C高群の傾向にあった ($t=2.01$, $df=33$, $p<.10$)。SP得点でもC高群>非C高群であった ($t=2.62$, $df=33$, $p<.02$)。平均評定値でもC高群>非C高群であった ($t=2.67$, $df=33$, $p<.02$)。次に仲間アセスメント尺度得点ではA尺度得点でC高群<非C高群の傾向にあった ($t=1.83$, $df=29$, $p<.10$)。C尺度得点ではC高群>非C高群であった ($t=11.52$, $df=33$, $p<.001$)。実習生アセスメント評定得点では項目4でC高群<非C高群であった ($t=2.06$, $df=33$, $p<.05$)。項目8でもC高群<非C高群であった ($t=2.24$, $df=28$, $p<.05$)。項目11ではC高群>非C高群であった ($t=2.58$, $df=33$, $p<.02$)。項目12でもC高群>非C高群であった ($t=2.54$, $df=33$, $p<.02$)。

(2)拒否児の下位群間比較：まずソシオメトリック得点ではD得点でA高群>非A高群であった ($t=4.97$, $df=24$, $p<.001$)。SP得点ではA高群<非A高群であった ($t=3.67$, $df=13$, $p<.01$)。SI得点ではA高群>非A高群であった ($t=3.85$, $df=24$, $p<.001$)。平均評定値ではA高群<非A高群であった ($t=2.49$, $df=24$, $p<.02$)。次に仲間アセスメント尺度得点ではA尺度得点でA高群>非A高群であった ($t=9.71$, $df=24$, $p<.001$)。W尺度得点ではA高群>非A高群の傾向にあった ($t=1.79$, $df=24$, $p<.10$)。実習生アセスメント評定得点では項目4でA高群>非A高群であった ($t=2.59$, $df=24$, $p<.02$)。項目5ではA高群<非A高群であった ($t=2.80$, $df=24$, $p<.01$)。項目7でもA高群<

非A高群であった ($t = 2.27$, $df = 24$, $p < .05$)。項目10ではA高群 > 非A高群であった ($t = 2.41$, $df = 24$, $p < .05$)。項目11ではA高群 < 非A高群の傾向にあった ($t = 1.73$, $df = 24$, $p < .10$)。項目12でもA高群 < 非A高群の傾向にあった ($t = 2.08$, $df = 14$, $p < .10$)。

(3)平均児の下位群間比較：ソシオメトリック得点の平均評定値において典型群 > 非典型群 ($t = 2.19$, $df = 34$, $p < .05$) であったが、その他の得点ではすべて典型群と非典型群間には有意差がなかった。

(4)無視児の下位群間比較：ソシオメトリック得点ではいずれの得点でもW低群と非W低群間に有意差はなかった。仲間アセスメント尺度得点ではW尺度得点でW低群 < 非W低群であった ($t = 6.66$, $df = 19$, $p < .001$)。実習生アセスメント評定得点では項目1でW低群 < 非W低群であった ($t = 3.57$, $df = 20$, $p < .01$)。項目2でもW低群 < 非W低群であった ($t = 2.43$, $df = 20$, $p < .05$)。項目3ではW低群 > 非W低群であった ($t = 2.73$, $df = 20$, $p < .02$)。項目5でもW低群 > 非W低群であった ($t = 2.97$, $df = 20$, $p < .01$)。項目6ではW低群 < 非W低群であった ($t = 2.18$, $df = 20$, $p < .05$)。項目7ではW低群 > 非W低群であった ($t = 2.97$, $df = 20$, $p < .01$)。項目10ではW低群 < 非W低群であった ($t = 2.15$, $df = 14$, $p < .05$)。項目11ではW低群 > 非W低群であった ($t = 2.25$, $df = 20$, $p < .05$)。項目12でもW低群 > 非W低群であった ($t = 2.17$, $df = 20$, $p < .05$)。

平均児の典型群と各下位群の比較

(1)ソシオメトリック得点：L得点ではC高群と非C高群が典型群よりも有意に多く (C高群 > 典型群 $t = 6.90$, $df = 20$, $p < .001$; 非C高群 > 典型群 $t = 6.27$, $df = 29$, $p < .001$)、A高群、非A高群、W低群、非W低群の4群は典型群よりも有意に少なかった (A高群 < 典型群 $t = 5.86$, $df = 27$, $p < .001$; 非A高群 < 典型群 $t = 6.81$, $df = 31$, $p < .001$; W低群 < 典型群 $t = 6.10$, $df = 23$, $p < .001$; 非W低群 < 典型群 $t = 7.59$, $df = 31$, $p < .001$)。D得点ではA高群と非A高群が典型群よりも有意に多く (A高群 > 典型群 $t = 8.29$, $df = 13$, $p < .001$; 非A高群 > 典型群 $t = 5.94$, $df = 31$, $p < .001$)、C高群、非C高群、W低群、非W低群の4群は典型群よりも有意に少なかった (C高群 < 典型群 $t = 6.22$, $df = 32$, $p < .001$; 非C高群 < 典型群 $t = 4.88$, $df = 35$, $p < .001$; W低群 < 典型群 $t = 3.56$, $df = 23$, $p < .01$; 非W低群 < 典型群 $t = 4.70$, $df = 31$, $p < .001$)。SP得点ではC高群と非C高群が典型群よりも有意に多く (C高群 > 典型群 $t = 10.01$, $df = 32$, $p < .001$; 非C高群 > 典型群 $t = 10.03$, $df = 35$, $p < .001$)、A高群、非A高群、非W低群の3群は典型群よりも有意に少なかった (A高群 < 典型群 $t = 11.45$, $df = 27$, $p < .001$; 非A高群 < 典型群 $t = 11.07$, $df = 31$, $p < .001$; 非W低群 < 典型群 $t = 2.38$, $df = 31$, $p < .05$)。しかし、W低群と典型群の間には有意差がなかった。SI得点ではC高群とA高群が典型群よりも有意に多く (C高群 > 典型群 $t = 2.48$, $df = 32$, $p < .02$; A高群 > 典型群 $t = 4.54$, $df = 27$, $p < .001$)、W低群と非W低群は典型群よりも有意に少なかった (W低群 < 典型群 $t = 6.53$, $df = 23$, $p < .001$; 非W低群 < 典型群 $t = 8.90$, $df = 31$, $p < .001$)。しかし、非C高群と非A高群は典型群と有意差がなかった。平均評定値ではC高群が典型群よりも有意に多く ($t = 4.55$, $df = 32$, $p < .001$)、A高群と非A高群が典型群よりも有意に少なかった (A高群 < 典型群 $t = 4.50$, $df = 11$, $p < .001$; 非A高群 < 典型群 $t = 3.27$, $df = 31$, $p < .01$)。しかし、非C高群、W低群、非W低群の3群は典型群と有意差がなかった。

(2) 仲間アセスメント尺度得点：A尺度得点ではA高群が典型群よりも有意に多く ($t = 11.30, df = 27, p < .001$)、非A高群が典型群よりも多い傾向 ($t = 1.81, df = 31, p < .10$) を示し、C高群が典型群よりも有意に少なかった ($t = 3.64, df = 26, p < .01$)。しかし、他の3群は典型群と差がなかった。C尺度得点ではC高群が典型群よりも有意に多く ($t = 10.57, df = 32, p < .001$)、非A高群が典型群よりも有意に少なかった ($t = 3.10, df = 31, p < .01$)。しかし、他の4群は典型群と有意差がなかった。W尺度得点ではA高群、非A高群、非W低群がそれぞれ典型群よりも有意に多く (A高群 > 典型群 $t = 2.99, df = 11, p < .02$; 非A高群 > 典型群 $t = 2.10, df = 31, p < .05$; 非W低群 > 典型群 $t = 2.80, df = 31, p < .01$)、W低群が典型群よりも有意に少なかった ($t = 3.55, df = 23, p < .01$)。

(3) 実習生アセスメント評定得点：項目1では非W低群 > 典型群 ($t = 2.38, df = 31, p < .05$) であった。項目2でも非W低群 > 典型群 ($t = 4.06, df = 31, p < .001$) であり、C高群 > 典型群の傾向 ($t = 1.73, df = 32, p < .10$) にあった。項目3では非W低群 < 典型群 ($t = 4.11, df = 31, p < .001$) であった。項目4ではA高群 > 典型群 ($t = 3.68, df = 14, p < .01$) であった。項目5ではA高群 < 典型群 ($t = 3.35, df = 27, p < .01$) であった。また、W低群 > 典型群の傾向 ($t = 2.05, df = 23, p < .10$) および非W低群 < 典型群の傾向 ($t = 1.76, df = 31, p < .10$) にあった。項目6では非W低群 > 典型群 ($t = 4.60, df = 31, p < .001$) であり、C高群 > 典型群の傾向 ($t = 1.77, df = 22, p < .10$) にあった。項目7ではA高群 < 典型群 ($t = 3.77, df = 27, p < .001$) と非W低群 < 典型群 ($t = 2.99, df = 31, p < .01$) であった。項目8ではC高群 < 典型群 ($t = 2.16, df = 27, p < .05$) であった。項目9では非W低群 > 典型群 ($t = 2.38, df = 31, p < .05$) であった。項目10ではA高群 > 典型群 ($t = 3.14,$

表7 仲間アセスメント尺度得点と各得点との相関係数

	男児 (N=64)			女児 (N=62)			全体 (N=126)		
	A	C	W	A	C	W	A	C	W
(1)月齢	.04	.02	-.14	-.01	.05	-.14	.02	.04	-.14
(2)ソシオメトリック得点									
L得点	-.24 ⁺	.64**	-.27*	-.21	.37**	-.15	-.22*	.51**	-.21*
D得点	.85**	-.23 ⁺	.26*	.71**	-.52**	.52**	.78**	-.37**	.39**
SP得点	-.65**	.52**	-.32*	-.59**	.57**	-.43**	-.62**	.54**	-.37**
SI得点	.55**	.38**	-.01	.40**	-.12	.29*	.47**	.11	.15
平均評定値	-.59**	.45**	-.29*	-.53**	.62**	-.58**	-.55**	.50**	-.39**
(2)実習生アセスメント評定得点									
項目1	-.08	-.37**	.26*	.09	-.38**	.61**	-.01	-.37**	.41**
項目2	-.01	-.26*	.32*	-.17	-.37**	.46**	-.08	-.30**	.37**
項目3	.10	.33**	-.36**	.19	.37**	-.47**	.14	.35**	-.41**
項目4	.45**	-.25*	-.01	.58**	-.38**	.20	.51**	-.31**	.09
項目5	-.37**	.31*	-.07	-.46**	.51**	-.46**	-.41**	.39**	-.24*
項目6	-.09	-.25*	.24 ⁺	-.20	-.43**	.45**	-.14	-.33**	.34**
項目7	-.29*	.35**	-.16	-.08	.50**	-.52**	-.18 ⁺	.43**	-.35**
項目8	.42**	-.03	-.34**	.52**	-.19	-.06	.47**	-.11	-.20*
項目9	.01	-.21	.28*	-.18	-.42**	.35**	-.08	-.31**	.31**
項目10	.49**	-.21	.01	.48**	-.32*	.16	.49**	-.26**	.08
項目11	-.37**	.25*	-.05	-.53**	.33**	-.23 ⁺	-.45**	.29**	-.14
項目12	-.29*	.28*	.00	-.46**	.50*	-.26*	-.37**	.38**	-.12
項目13	-.02	-.19	.25*	-.33**	-.22 ⁺	.20	-.18 ⁺	-.21*	.23*

+ : $p < .10$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$

df = 11, $p < .01$) と W 低群 < 典型群 ($t = 3.87$, df = 21, $p < .001$) であった。項目 11 では A 高群 < 典型群 ($t = 2.65$, df = 27, $p < .02$) であり, C 高群 > 典型群の傾向 ($t = 1.96$, df = 32, $p < .10$) にあった。項目 12 では A 高群 < 典型群 ($t = 2.54$, df = 27, $p < .02$) であった。項目 13 では非 W 低群 > 典型群 ($t = 2.99$, df = 31, $p < .01$) であった。

相関係数

表 7 は, 仲間アセスメントの 3 つの尺度得点とソシオメトリック得点および実習生アセスメントの項目得点との相関係数を男女別と男女全体でまとめたものである。仲間アセスメント尺度得点と実習生アセスメント評定得点との相関係数は, いくぶん男児よりも女児の方が大きいけれども, 男女の相関パターンは類似しており, 男女差はほとんど見られない。

考 察

ソシオメトリック指名法の得点に関する地位群間比較の結果は, 本研究の地位群分類で使った指名法得点が 5 つの地位群を明確に区別しているか否かを確認するものであり, その意味で地位群分類の操作チェックである。表 4 の地位群間比較の結果から, 5 地位群の中で人気児群は L 得点と SP 得点で最も高く, D 得点で最も低かった。逆に拒否児群は D 得点では両論児群に次いで第 2 位の高い値を示し, L 得点や SP 得点では第 4 位と第 5 位の低い値を示した。無視児群は L 得点と D 得点では第 5 位と第 4 位の低い値を示し, SI 得点でも最も低い値を示した。両論児群は L 得点で第 2 位, D 得点で第 1 位の高い値を示し, SI 得点でも最も高い値を示した。これらの結果から, 本研究の地位群分類に使ったソシオメトリック指名法の得点は各地位群を明確に分類していたことが分かる。地位群分類に使わなかったソシオメトリック評定法の平均評定値でも, 人気児群は仲間から最も受容され, 拒否児群は最も受容されていなかった。しかし, 無視児群は平均児群と差がなく, 拒否児群よりも有意に多く受容されていた。この結果から, 無視児は仲間から無視されやすい存在ではあるが, 決して仲間から受容されていないわけではないと示唆される。

ところで, これら 5 地位群の分散を比較したところ, 拒否児群は L 得点, D 得点, SI 得点, 平均評定値のいずれにおいても分散が大きかった。また仲間アセスメントの A (攻撃性) 尺度得点でも最も分散が大きかった。これらの結果は, 拒否児群の中には仲間から極端に拒否されている幼児, あるいは極端に攻撃性の強い幼児とそうでない幼児が混在していることを示唆する。その点で, 本研究の幼児においても児童の研究 (Bierman, Smoot, & Aumiller, 1993; French, 1988, 1990; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990) と同様に, 拒否児群を攻撃的拒否児 (A 高群) と非攻撃的拒否児 (非 A 高群) の下位群に 2 分割することが適切であったと考えられる。それに対して, C (社会的コンピテンス) 尺度得点や W (引込み思案) 尺度得点では 5 地位群間の分散に有意差は見られなかった。この結果は前田・片岡 (1993) の結果とは異なるが, 前田 (1993) の結果とは一致している。前田・片岡 (1993) の分散データに基づいて 5 地位群間で有意差検定をしたところ, A 尺度得点では $\chi^2(4) = 24.89$, $p < .001$, C 尺度得点では $\chi^2(4) = 19.79$, $p < .001$, W 尺度得点では $\chi^2(4) = 28.92$, $p < .001$ でそれぞれ有意であった。つまり, A 尺度得点では拒否児群の分散が最も大きく, C 尺度得点では人気児群の分散が最も大きく, W 尺度得点では無視児群の分散が最も大きかった。ところが前田

(1993)の分散データについて同様の分析をしたところ、A尺度得点では $\chi^2(4) = 9.50$, $p < .05$ で有意となり、確かに拒否児群の分散が最も大きかったが、C尺度得点では $\chi^2(4) = 2.67$, W尺度得点では $\chi^2(4) = 7.72$ でいずれも有意でなかった。これらの研究結果と本研究結果を考え合わせると、幼児でも拒否児群の分散は一貫して大きく、いくつかの下位群から構成される可能性を示唆する。それに対して、社会的コンピテンス尺度得点や引っ込み思案尺度得点の分散に基づいて人気児群や無視児群をいくつかの下位群に分類する積極的な必要性や意義はないかもしれない。しかし、現在のところ幼児や児童を対象とした研究では人気児群や無視児群の下位群比較を検討していないので、本研究では敢えてこれらの下位群を分類し比較することにした。それは、たとえ人気児群や無視児群には極端な仲間評価を受ける者がいなくても、2つに分類された下位群間にはいくつかの行動特徴に相違が見られる可能性も残されているからである。

本研究の仲間アセスメント尺度得点の地位群間比較の結果は以前の研究結果（例えば、Coie & Dodge, 1983, 1988；佐藤・佐藤・高山, 1988；前田・片岡, 1993）とほぼ一致していた。つまり、攻撃性では両論児群と拒否児群が他の3群よりも有意に多く、社会的コンピテンスでは人気児群が最も優れ、引っ込み思案傾向では拒否児群が両論児群や人気児群よりも有意に強かった。これらの結果および表7の相関係数の結果から、各地位群を群全体として見ると、拒否児群は攻撃性だけでなく、同時に引っ込み思案傾向も強い群であるといえる。その意味で、幼児期においても拒否児群が最も仲間関係に問題を抱え、社会的スキルに乏しいことが示唆される。これらの示唆は実習生アセスメントの項目別の比較結果からも裏付けられる。表4から分かるように、両論児群や拒否児群は項目4「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」、項目8「命令」、項目10「けんかの始発」などを他の3群よりも強く示すと評定されていた。これらの行動特徴はいずれも仲間遊びや仲間関係の維持を破壊する行動である。その意味で拒否児群は、これらの行動に代わる友好的な社会的スキルの習得と実行を促す社会的スキル訓練を最も必要としている群であると考えられる。

表5と表6から、各群の2つの下位群間差または2つの下位群と典型群との比較結果に基づいて、各下位群の特徴をまとめて考察する。まず人気児群のC高群と非C高群および典型群の比較結果をまとめると、L得点、SP得点および平均評定値ではC高群が非C高群よりも高かった。これは、人気児の中でも社会的コンピテンスが高いと仲間から見られているC高群の方がより仲間から好かれ受容されていることを示している。仲間アセスメントの社会的コンピテンス尺度得点から分かるように、C高群は非C高群よりも社会的コンピテンスに優れているが、非C高群の社会的コンピテンスは典型群と同様に平均的な値を示していたことによると考えられる。またC高群は非C高群よりも仲間と友好的な関わりをもてるので、その分だけ攻撃性（A尺度得点）を示さないで済むのであろう。この点については実習生アセスメントの結果とも一致する。項目4「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」と項目8「命令」はC高群が非C高群よりも有意に少ないが、逆に項目12「仲間への適切な応答」はC高群が非C高群よりも有意に多いと実習生から評定されていた。興味深いことは、項目11「報復的攻撃」においてC高群が非C高群よりも有意に多いと見られていることである。これは、表2の質問内容から分かるように、自分から挑発する攻撃ではなく、相手の邪魔や攻撃に抗議するという応答的・自衛的な攻撃である。その意味で、C高群は単に仲間を認め受容するだけでなく、必要な場合には適切な自己主張を発揮できる幼児であると考えられる。

拒否児群のA高群は非A高群や典型群よりもD得点やS I得点が有意に高く、逆にSP得点や平均評定値が有意に少なかった。非A高群の拒否児も典型群よりも拒否され受容されていないけれども、攻撃性の強いA高群はそれ以上に拒否されやすいことが分かる。またA高群は非A高群や典型群よりも攻撃性尺度得点が有意に高いだけでなく、引っ込み思案尺度得点も高かった。引っ込み思案傾向は拒否児群全体として見ると、平均児群や無視児群と差がない。しかし下位群別に見ると、攻撃性の強いA高群は同時に引っ込み思案傾向も強いと仲間から見られていた。実習生の評定からも分かるように、A高群は項目3「積極的な仲間遊び」や項目9「仲間との会話の少なさ」では人気児群や平均児群と同程度であることから、A高群は決して仲間関係から孤立しているために消極的・引っ込み思案傾向を示しているわけではなさそうである。むしろ、項目4「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」や項目10「けんかの始発」を示しやすく、項目5「協調性」や項目7「上手な意志伝達と依頼」や項目12「仲間への適切な応答」に乏しいことと関連しているように思われる。つまり、A高群は度々仲間とトラブルを引き起したり、楽しい仲間遊びを維持できないために仲間から敬遠されやすく、その結果として仲間に対して引っ込み思案傾向を示しやすいのではないかと考えられる。この意味で、A高群の引っ込み思案が仲間拒否によるのであれば、やはり良好な仲間関係を作ったり維持するのに必要な社会的スキルを身につける必要があろう。

無視児群の2つの下位群はいずれのソシオメトリック得点でも差がなかった。しかしW低群と非W低群の両群とも、典型群よりもL得点、D得点、S I得点が有意に低かった。また仲間アセスメント尺度得点では、両群とも攻撃性尺度得点や社会的コンピテンス尺度得点では典型群と差がなかった。仲間アセスメント得点で見られた唯一の有意差は下位群分類に使用した引っ込み思案尺度得点のみであり、W低群が典型群よりも有意に低く、非W低群が典型群よりも有意に高かった。それに対して、実習生アセスメントでは多くの項目において差が見られた。項目別に見ると、非W低群はW低群や典型群よりも項目1「一人遊び(熱中)」, 項目2「一人遊び(非熱中)」, 項目6「仲間遊びへの非加入」が有意に多く、引っ込み思案傾向の強い無視児ほど仲間から孤立した一人活動を示すと評定されていた。さらに項目3「積極的な仲間遊び」, 項目5「協調性」, 項目7「上手な意志伝達と依頼」では非W低群がW低群や典型群よりも有意に低く、項目9「仲間との会話の少なさ」と項目13「引っ込み思案」では非W低群が典型群よりも有意に高いと評定されていた。また項目11「報復的攻撃」と項目12「仲間への適切な応答」では非W低群がW低群よりも有意に低かった。これらの結果は、いずれも仲間から引っ込み思案傾向が強いと見られている非W低群の無視児ほど仲間関係に消極的であり、仲間から離れて孤立しやすいことを示唆している。それに対して、同じ無視児群の中でもW低群は典型群と差がないか、むしろ項目5「協調性」では典型群よりも有意に多く、項目10「けんかの始発」では有意に少なかった。このように本研究の無視児群の2つの下位群は多くの実習生アセスメント項目で顕著に異なっており、仲間からの無視と引っ込み思案傾向が重複する場合には仲間遊びや仲間関係から離脱しやすいことが分かる。

最後に、平均児群の2つの下位群比較では平均評定値で典型群が非典型群よりも有意に高かったが、その他のソシオメトリック得点、仲間アセスメント尺度得点および実習生アセスメント項目得点のいずれにおいても有意差は見られなかった。これらの結果から、平均児群を敢えて2つの下位群に分割する必要はないといえる。ただし、典型群は仲間アセスメントのA尺度得点、C尺度得点およびW尺度得点のいずれも平均的な平均児から構成されるためか、各得点

の分散値では典型群と非典型群に多くの有意差が見られた。それらを列挙すると、C尺度得点、W尺度得点、実習生アセスメントの項目2、項目4、項目6、項目10、項目13であり、いずれも典型群の分散が非典型群よりも有意に小さかった。その意味で典型群は平均児群の中でも最も平均的な幼児から構成されていたといえよう。

以上の下位群比較の結果は、明らかに群内分散の大きい拒否児群だけでなく、群内分散の小さい人気児群や無視児群でも仲間受容度、仲間拒否度、あるいは多様な行動的特徴の点で下位群間に顕著な相違が見られることを示した。確かに群内分散の大きさは異なる下位群から構成される可能性を示唆するが、それは可能性を示唆する1つの指標にすぎないといえるかもしれない。仲間アセスメント指名法を使用した本研究や以前の研究(Bierman, Smoot, & Aumiller, 1993; French, 1988, 1990; 前田・片岡, 1993; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990)において、なぜ攻撃性では拒否児群の分散が大きいのであろうか。その理由については、いくつか考えられる。例えば、攻撃的行動は頻度が少なくても激しいものであれば、外的に目立ちやすく、しかも仲間に被害を与えるので、幼児でも一貫した仲間評価をしやすいのかもしれない。事実、本研究でも攻撃性に関する仲間アセスメントでは特定の幼児に仲間からの指名が集中する傾向にあった。それに対して、社会的コンピテンスや引っ込み思案は一定の期間継続しなければ、仲間に気づかれず、そのため極端な仲間評価を受ける者が少なく、群内の分散が小さくなったのかもしれない。このように考えると、今後の研究ではソシオメトリック測度と仲間アセスメント指名法測度の結果を組み合わせるだけでなく、仲間アセスメント評定法測度とも組み合わせる必要がある。また仲間アセスメント指名法測度と組み合わせる下位群分類をする場合には、本研究のように群内分散が大きくない地位群についても、いくつかの下位群に分類して比較してみる必要があると指摘できる。あるいはFrench (1988, 1990)のように、多様なアセスメント測度に基づいてクラスター分析を行い、下位群を構成する方法も1つの有望な研究アプローチであろう。

要 約

本研究では幼稚園の年中児64名と年長児62名の計126名を対象にして写真ソシオメトリック指名法を実施し、その結果に基づいて人気児群、拒否児群、無視児群、平均児群および両論児群の5地位群に分類した。さらに、両論児群を除く他の4地位群のそれぞれを2つの下位群に2分割して、これらの地位群間および下位群間でソシオメトリック得点、仲間アセスメント尺度得点および実習生アセスメント項目得点を比較した。主な結果は次のとおりであった。

①仲間アセスメント尺度得点の地位群間比較の結果は、以前の研究結果(例えば、前田・片岡, 1993)とほぼ一致する結果を示した。つまり、攻撃性は両論児群と拒否児群が他の3群よりも有意に多く、社会的コンピテンスは人気児群が最も優れ、引っ込み思案傾向は拒否児群が両論児群や人気児群よりも有意に強かった。

②実習生アセスメント項目得点の地位群間比較の結果は、両論児群や拒否児群は項目4「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」、項目8「命令」、項目10「けんかの始発」などを他の3群よりも強く示すと評定されていた。

③人気児群の下位群間比較から、C高群は非C高群以上に仲間から好かれ受容されていた。また、実習生アセスメントの結果では項目4「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」、と項目

8「命令」においてC高群が非C高群よりも有意に少なく、項目11「報復的攻撃」と項目12「仲間への適切な応答」においてC高群が非C高群よりも有意に多かった。

④拒否児群の下位群間比較から、攻撃性の強いA高群は非A高群以上に仲間から拒否され受容されていなかった。またA高群は非A高群よりも引込み思案尺度得点も高かった。実習生アセスメント結果では、A高群は項目4「怒りやかんしゃくによる遊びの破壊」や項目10「けんかの始発」を示しやすく、項目5「協調性」や項目7「上手な意志伝達と依頼」や項目12「仲間への適切な応答」に乏しかった。

⑤無視児群の2つの下位群はいずれのソシオメトリック得点でも差がなかった。しかし、実習生アセスメントでは多くの項目において有意差が見られた。非W低群はW低群や典型群よりも項目1「一人遊び（熱中）」、項目2「一人遊び（非熱中）」、項目6「仲間遊びへの非加入」が有意に多く、さらに項目3「積極的な仲間遊び」、項目5「協調性」、項目7「上手な意志伝達と依頼」では非W低群がW低群や典型群よりも有意に低く、項目9「仲間との会話の少なさ」と項目13「引込み思案」では非W低群が典型群よりも有意に高いと評定されていた。また項目11「報復的攻撃」と項目12「仲間への適切な応答」では非W低群がW低群よりも有意に低かった。

⑥平均児群の2つの下位群間比較では、ソシオメトリック平均評定値のみにおいて典型群が非典型群よりも有意に高いという結果であった。しかし、各得点の分散を比較すると、いくつかの項目で有意差が見られ、いずれも典型群の分散が非典型群よりも小さかった。

本研究は幼児を対象にして拒否児群の下位群間比較だけでなく、人気児群や無視児群の下位群間比較を試みた数少ない研究である。本研究の結果を総合すると、群内分散の大きい拒否児群だけでなく、群内分散の小さい人気児群や無視児群でも仲間受容度、仲間拒否度、あるいは多様な行動的特徴の点で下位群間に顕著な相違が見られると結論される。今後幼児または児童を対象とした下位群間比較の研究では、たとえ群内の分散が大きくなっても、各地位群を特色づける行動的特徴に基づいていくつかの下位群に分類して比較することが必要であると指摘できる。

引用文献

- Asher, S. R., & Parker, J. G. 1989 Significance of peer relationship problems in childhood. In B. H. Schneider, G. Attili, J. Nadel & R. P. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective*. pp.5-23. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Bierman, K. L., Smoot, D. L., & Aumiller, K. 1993 Characteristics of aggressive-rejected, aggressive (nonrejected), and rejected (nonaggressive) boys. *Child Development*, 64, 139-151.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status : A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 1983, 29, 261-282.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school : A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59 . New York : Cambridge University Press.
- French, D. C. 1988 Heterogeneity of peer-rejected boys : Aggressive and nonaggressive subtypes. *Child Development*, 59, 976-985.
- French, D. C. 1990 Heterogeneity of peer-rejected girls. *Child Development*, 61, 2028-2031.

- Hymel, S., Bowker, A., & Woody, E. 1993 Aggressive versus withdrawn unpopular children : Variations in peer and self-perceptions in multiple domains. *Child Development*, 64, 879-896.
- Pekarik, E. G., Prinz, R. J., Liebert, D. E., Weintraub, S., & Neale, J. M. 1976 The pupil evaluation inventory : A sociometric technique for assessing children's social behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 4, 83-97.
- Patterson, C. J., Kupersmidt, J. B., & Griesler, P. C. 1990 Children's perceptions of self and of relationships with others as a function of sociometric status. *Child Development*, 61, 1335-1349.
- Rubin, K. H., LeMare, L. J., & Lollis, S. 1990 Social withdrawal in childhood : Developmental pathways to peer rejection. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp.217-249. New York : Cambridge University Press.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1988 仲間関係に問題をもつ子ども—仲間アセスメントによる分析— 宮崎大学教育学部紀要 教育科学 第63号, 17-23.
- 前田健一 1993 幼児の仲間関係に関する研究—仲間内地位と社会的行動特徴に関する仲間アセスメントの関係— 愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学 第40巻, 第1号, 61-72.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方並びに園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては井伊三奈さん、市村佳代子さん、河野寿子さん、白石梓さん、土佐香織さん、二神華子さん、三原佳美さん、山田恭子さん、渡邊知美さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。